

観音物語 (26) 慈悲のまなざし

ぐ いっさいく どころく じげん じしゅじょう ふくじゅかい むりょう ぜ こ おうちょうらい
 具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故応頂礼

一切の功德を具し 慈眼をもって衆生を視たもう 福聚の海無量なり 是くの故に^{まさ}に頂礼すべし

観音さまは無量の功德を具え、慈悲のまなざしで私たちを心配しておられる。海の幸のように無数の恵みをかかえておられるから、心から念じて礼拝すべきであると、観音経は結んでいる。

観音経のこの結びの偈文に「慈眼視衆生」と表記されている。じつは、観音さまの目は非常に厳しい眼つきである。つまり、観音さまの目はだだの目ではなく「眼」であり、その見方は「視」であると表記しているからである。この漢字を吟味してみよう。

見るという漢字には、見、観、視、看、診などがあり、それぞれに異なる意味がある。観音さまは衆生をただぼんやりと眺めているのではない。ジッと見つめておられる。それは監察の「眼」である。また「視」の漢字も、注視、監視、検視、警視という用例があるように、どれも厳しい眼つきばかりである。

これはお母さんがブランコで遊んでいる子どもを公園のベンチに坐って注意ぶかく眺めている眼つきだ。子どもが落ちたり、他の子どもの頭にぶついたりしないか、遠くからジッと注意ぶかく眺めている眼つきである。優しさのなかに厳しさを秘めた慈悲の眼であるから、観音経では「慈眼をもって衆生を視たもう」と表記されているわけである。

仏像の開眼供養には五つの眼を入魂する。仏眼、法眼、慧眼、天眼、肉眼の五眼である。

肉眼は表面的なものごとの識別をする視力である。天眼は六感をはたらかせる洞察力。慧眼は智慧による行動力。法眼は自然界の法則に逆らわない正しい判断力。仏眼は究極の目標が掌握されている清浄なる心眼力である。肉眼は表面を見るだけであるから、内面を洞察するには天眼や慧眼、法眼に目覚めることが必要になってくる。あらゆる動きが掌の上のできごととして眺められれば、まさしく仏眼となる。

仏像をつくってそのまま放置すればただの彫刻にすぎない。これでは「仏つくって魂入れず」の状態である。仏像は開眼供養によっていのちが吹きこまれ、人々に拝まれる本尊になる。新築や新車のお祝い、地鎮祭も開眼供養と同じ意味がある。家屋に仏の性根がなければ犬小屋と同じであるといえよう。

入魂とは行為の出発式である。機械やロボットは、そのままでは私たちに利害を及ぼすから、産業ロボットが新しく導入されれば入魂式によって従業員の一人としてはたらいてくれる。トヨタ自動車は必ずこの入魂式を行なっている。

労働は気概だけでは十分といえない。物と心が一枚になってこそ仕事は完成する。考えて動き、そのなかに価値を見出せば人間のはたらきになる。指示されて動くのは家畜である。

物質は開眼供養によって仏の活動体となる。すべてに尊いいのちがあるから、モノを粗末にすれば眼がつぶれると、昔からいわれている。モノを大切に扱えば成仏する。慈愛の眼が開かれていれば、つらいときも温情まで失ってしまうことはない。眼は「見る」から「思う」へ、そして「エネルギー」へと昇華していく。

諸仏のなかで人気ナンバーワンの観音さま、その秘密を推理していただけたと思う。

観音経は子どもじみているようだが、立派なおとなの世界が描かれていた。

念彼観音力はあなた自身にあることに気づいてほしい。

おとなの絵本「観音物語」を閉じる。